――これは、本来の歴史とは別の世界線の物語――

俺はリムル＝テンペスト。三上悟として日本でサラリーマンをしていたが、通り魔に刺され死亡し、この世界にスライムとして転生した。

それからは色々あって、魔物たちが平和に暮らせる国「ジュラ・テンペスト連邦国」の盟主になったりした。

その間も、運命の人であるシズさんと出会い、この姿を得たり、シズさんが育てていた教え子達を救ったりしながら、第二の人生を楽しんでいる。

そんな折、出かけた先のダンジョンで、偶然にも魔王クレイマンと遭遇してしまった。

魔王クレイマンは、俺の国であるテンペストにとっての宿敵だ。

当然、俺とクレイマンは交戦状態になったのだが…。

おのれ！スライムごときがこの私にィ!!

相手は魔王です。油断しないよう。

流石魔王だけあってしぶといな…でもこれなら…!!

魔王と聞いていたので、圧倒的な強さを予想していたのだが、今の俺でも勝てそうな実力の相手だった。
コイツってこんなに弱いのか？　いや、流石にそんな事は無いだろう。
大賢者さんも警戒しているし、何か凄い力を隠しているに違いない。
俺はユニークスキル「暴食者」をいつでも使えるように、警戒しながらクレイマンとの距離を詰めた。

死ぬがいい!!
下等なスライムめが!!

モゼゼ

なっ…!!
喰らい尽くせ!
暴食者!

待って下さい
マスター!
あれは…!!

俺が近づいた所で、クレイマンは何かを俺に向かって投げつけてきた。
やっぱりか!　警戒していなければ直撃を喰らう所だった。
俺は瞬時に「暴食者」を呼び出し、それを飲み込んだ。
その瞬間、大賢者が俺に強烈な警告を出した。まさか…!

モゼゼ

モゼゼ

クックック…
かかったなスライム!!
それは支配の宝珠だぁ!!

うぐっ…
あっ…!!

何でも喰らい尽くす貴様なら
引っかかると思っていたぞ!!

ビクッ

えっ？　何が起こったんだ？
…あいつ今、支配の宝珠って言った？
あの攻撃は、俺に支配の宝珠を食わせるための罠だったのか!?

か、体が
動かない
っ…!?

すすすっ

クックック…
我が計画を邪魔され続けた恨みだ…
徹底的に辱めてやろう…！

うぐっ…!!

そ、そんなっ…
スキルは!?
大賢者とは会話
出来てるじゃないか！

解。私だけは支配から
逃れる事に成功しました。
これから解呪を試みます。
それまで耐えて下さい。

告。支配の宝珠を飲み込んだ事により、
マスターの肉体の支配権が、
クレイマンに移っているようです。

わ、わかった…！
大賢者だけが頼りだ
頼んだぞっ…!!

さあ、か弱い少女の肉体になってこの私を楽しませるのだ!!

ひっ!! あっ!! 何すんだこの変態っ!!

なっ…!!

ほほう、案外美しい体をしているじゃないか、ええ?

俺の服が剥ぎ取られると、無性の状態だった俺の肉体は、瑞々しい少女の肉体になっていた。
肉体の性別までコイツの命令通りになってしまうのか…かなり強力な支配と言わざるを得ないな…。

クックックッ…どうだ？憎い敵に醜態をさらす気分は？

くっ…悪趣味なっ…!!

っ……!!

クレイマンはマネキン人形の手首を操り、俺の体に近づけた。
感情の無い無機質な手首が俺の乳首を愛撫する。
敏感な所を責められて、思わず声を漏らしそうになる所を、俺は悪態をつくことでごまかした。

そうは言っても体は正直だな
頬が赤くなっているぞ？

私は寛容だからな
首から上の支配権は
貴様に残しておいてある
精々メスとして媚びる為に
耽美な声で鳴くがいい…！

くっ…誰がっ…
ああああっっ♥

うぐぅっ…
ひぃっ♥

ふ～っ
ぷしゅ
ふ～っ
ぷくっ
すすす。

そうだ！泣け！叫べ!!
自分が下等なスライムだったと
改めて自覚することだ！

その手首は俺の腹をなぞりながら下へと降りて、俺の割れ目をなぞり始めた。
あまりの敏感さに、俺はついに声を我慢できなくなり、悲鳴を上げてしまう。
こんな奴を楽しませる事になるなんて…。俺は唇を噛み締め、その刺激に耐える。

大賢者、まだ呪いは解除できないのか？どれくらいかかりそうだ？

解。早くても1週間はかかります。魔王すら従えかねない強力な呪いです。

1週間!? そんなにも…でも何とか耐えなきゃな…

ふむ、裸だけでは品が無いこれに着替えるがいい

なっ…！こんな破廉恥な…ッ！

拒否権などない。俺の身体は操られるがままクレイマンの指示で、女性用の下着姿に着替えさせられたのだった。

手足を包む手袋と靴下は、上等な素材を使っているのか、肌触りがとてもいい。
そして、胴体を包むコルセットの程よい締め付け感と、小さいパンツの密着感と頼りなさ。
今の俺の体が女性体である事を、肌の感触だけで思い知らされてしまう。
こいつの目の前で、こんな格好をさせられるなんて…俺は屈辱感でクレイマンを睨みつける。

ハッハッハッ!!
よく似合っている
ではないか!!

くっ…!
だ、誰がこんな格好…!
この変態野郎が っ!

身体のラインを綺麗に魅せる
高級な衣装の良さがわからんとは
所詮は下等なスライムだな

キッ

鏡でも見てみたらどうだ？
ドキ
クレイマンはそう言って、俺の目の前に大きな鏡を置いた。
確かに可愛い…こんな美少女が、こんなセクシーな恰好を…。
い、いやっ！　何言ってるんだ!!　これは俺の姿だぞ!!
くそっ…クレイマンの奴、ニヤニヤと見下しやがって…!!
えっ…
ハッハッハ！自分の姿に見惚れたか！貴様もとんだ変態だな！

そんなに気に入ったか！ならその姿を見ながらオナニーでもするがいい
ひっ！だめっ…！だめだめっっ！！
ふ～ふ～
びくっ
びくっ
クレイマンに操られた腕が、勝手に自分の割れ目をなぞりあげる。
目の前の鏡に、オナニーしている美少女が映し出される。
その美少女の動きとリンクして、俺の体に女性としての快楽が与えられていく。
ヤバい、気持ちいい。俺の男心が目の前の少女をもっと辱めたいと思ってしまう。
でもその少女は俺なわけで…頭が混乱する。

随分と興奮しているではないか
貴様は自分の姿でオナニーできる
変態だったのか？
ち、違っ…
そんな事はっ…
ひっ!!
俺の体は、さらに俺に見せつけるように、オマンコを左右へと広げる。
綺麗なピンク色のオマンコが、愛液の糸を引いて広がっていく。
こんな美少女が、こんな恥ずかしい恰好を、俺の目の前で…。
快楽の塊のような衝動が、俺の奥から湧き上がってくる。
ダメだ…もう我慢できない。
ドキ
ドキ
はぁ
はぁ
ぐぱぁ♥

翌日。
俺はクレイマンが支配している、傀儡国ジスターヴにある、場末の酒場へ放り込まれていた。
ここにはガラの悪い冒険者が集まっているようで、客は俺を見るなり下品なヤジを飛ばしてきた。

おお、可愛い
給仕じゃねぇか！
なんだよそのエロい
メイド服は！

ほらほら、こっちに来いよ
俺達がたっぷり可愛がって
やるからよ！

くっ…

俺の体はクレイマンに操られていたが、今は一時的に体の主導権が俺に戻されている。
勿論、クレイマンの意向に逆らうような行動を取れば、すぐに体の主導権が奪われるという条件付きでだ。
つまり、クレイマンとしては、俺が自分からこいつらに奉仕するのを期待しているという事だ。
悪趣味な奴…しかしそのおかげで、呪いの解除に必要な大賢者の演算能力がアップしている。
早くこの呪いを解除できるよう、クレイマンの機嫌を損ねないようにしなければ。

言われるがままテーブルに登って両足を開くと、男達から歓声が上がる。
くそ、こんなに大勢の男が見ている前で、こんな格好になるなんて…。
とは言え、ここで彼らに逆らっても、事態が好転するとは思えない。
俺は悪態をつきたくなるのを我慢して、男達の命令に従って足を開いた。

男達に怒鳴りつけられ、俺は体をびくっと震わせた後、
メイドビキニのパンツに指を添わせる。
くそっ…相変わらず上質な布で作られてる…
触り心地がめちゃくちゃ良くて、気持ちいい…。
魔王だけあって、あんな白いスーツでお洒落してるだけあって、
こういう所のこだわりは普通に凄いなアイツ。
いやいや、感心してどうする…
俺は今、アイツの命令で辱められてるんだぞっ！

おいおい、パンツの上からオナニーってバカかよ！中身を見せろや！
ドキ
ドキ
ひっ…！
ふっ
ふっ
ふるっ
ふるっ
俺は従うようにメイドビキニのパンツをずらし、割れ目を露出させる。
軽いオナニーで少し湿ったオマンコが、荒くれ男達の視線にさらされる。
うわっ…こいつらめちゃくちゃ見てくる…。
こんな大勢の前で…恥ずかしい…。
でも、なんだこの感覚…。ドキドキして、呼吸が荒くなってきて…。

まだ毛も生えてない
割れ目の癖して
こんな仕事してるのかよ！
とんだ変態だなぁ！

ドキ

ほらほら！
変態は変態らしく
公開オナニーして
俺達を楽しませろよ！

っ…♥…っ♥
っっっ♥♥♥

ドキ

俺は男達に脅される形で、割れ目に直接指先を這わせて、
オナニーを開始した。
パンツ越しでの触り心地も良いのだが、
やはり直接触る刺激の方が強い。
俺は声を殺しながら、不器用な手つきで、
ゆっくりと敏感な所を刺激していく。

ふっ
ふっ
ふる
ふる
しちゅ♡
しちゅ♡

くそ、こいつじれってぇな！もっと見せろよッ!!
ひあぁっ!?
?!
おおっ、流石に綺麗なピンク色じゃねぇか！処女じゃないのは残念だけどな
こんな所で働く奴が処女なわけあるかよ！
俺の不器用なオナニーに苛立った冒険者の一人が、俺の割れ目を強引に開いた。
ひんやりとした酒場の空気と、酒臭く生暖かい男達の吐息が、濡れた粘膜に当たる。
くそっ…こんな所まで見られるなんて…。
俺はゾクゾクとした興奮で体を震わせた。
ゾクッ
ゾクッ
ゾクッ

なんだ？
体なんか震わせて
もしかして小便でも
したいのか？

い、いやっ…
そういうわけでは…

そいつはいい！
ほら、このジョッキに
小便しろ！
今、ここで!!

えっ!? えええええっっっ!!!?
こんな場所で、こんな大勢に見られながら放尿するなんて、
そんな恥ずかしい事…。
って、大賢者さん!? 律儀に膀胱に水分貯めなくていいから！
あっ…ダメだこれ…もう我慢できないっ…。

ドキ
ふるっ
ふるっ
ドクン